

## はじめに

著者	内藤 葉子
引用	女性学講演会. 2019, 22 (1)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/00016639">http://hdl.handle.net/10466/00016639</a>

## はじめに

女性に関わる問題の多くは、ケアがおもに女性によって担われてきたことと無関係ではありません。ケアへの責任ゆえに、女性は労働市場で男性と対等に働くことは難しくなります。また、貧困問題は高齢者・障がい者・母子と、ケアを必要とする者がいる場にもっともよく現れてきます。こうした社会的・経済的な歪みをどのように考えたらよいのでしょうか。

こうした問題を考えるさいの一つの視角として、わたしたちの社会がどのような人間や家族を「規範」とみなしているかという問いが立てられます。あるべき人間像（そしてあるべき家族像）を規定してきた一つの有力な思想が「リベラリズム」です。哲学や政治思想の伝統において、リベラリズムは自立した責任ある主体を規範として描いてきました。そして個人の自由と選択を尊重する社会を構想してきました。しかし、依存者、そして依存者にもっとも近いところでケアを提供してきた女性は、こうした自由な個人像に十分に適合できません。生存や生死に関わる領域は、リベラルな規範からは周辺化されてきたのです。

けれども依存に関わる者が周辺化される社会は公正だといえるのでしょうか。「ケアの倫理」は依存に注目することで、リベラリズムが脆弱で不安定な生を生きる存在を不可視化してきたことを鋭く批判します。それはこの社会や人間の規範的在り方に対して再考を迫る試みといえるでしょう。

2018年10月6日に開催された今季の女性学講演会は、「ケアの倫理とリベラリズム——依存、生殖、家族——」というタイトルを掲げて政治思想・法哲学の観点からこの問題にアプローチしました。三者三様の報告によって「ケアの倫理」と「リベラリズム」の緊張関係が論じられ、その現状と課題について検討されました。本記録集が、依存を問い直すことから別様の社会を構想する、そうした試みに向けての確たる一歩となれば幸いです。

2019年3月31日

コーディネーター 内藤葉子（大阪府立大学教員、女性学研究センター）